論　文

雑誌『スタイル』と初期日中戦争、一九三六―一九三八

井竿富雄

はじめに

小論は、雑誌『スタイル』が日中戦争という状況の変化にどのように対応していたかについて、記事や編集後記などの中から考察していくことを目的とする。

雑誌『スタイル』は、岩国出身の小説家宇野千代（一八九七―一九九六）によって一九三六年に創刊されたものである。主たる内容は服飾に関する記事（女性向けだけではなく、男性の服装についての連載記事もある）、そして映画や俳優に関する記事が多い。連載小説や、テーマを決めた読み切りの掌編小説特集も組まれた。その他も、都市部の中産階級以上の人々に読まれるようなものが中心と考えられる。[1]

このような雑誌と日中戦争がどのように関係するのか、という疑問が当然ありうる。しかし、先行研究が示すように、日中戦争は『スタイル』が得意としていたような記事が掲載しづらくなったり、同誌の描き出すような生活が排撃されたりする時代であった。藤堂友美氏の論文は、『スタイル』が戦時下の状況に合わせて、各種の記事や企画を立てたりする中で政治状況に合わせて生きのびようとした様子を概括的に描き出している。[2] また、服飾とともに扱われる髪型、特に女性のパーマネントは、戦時下で排撃運動の対象となった。このパーマネント排撃運動への『スタイル』の対応も先行研究で明らかにされている。[3]

ただ、これから述べるように、日中戦争以前から、日本の政治・社会は少しずつ緊張を深めていた。このなかで、『スタイル』は明快に「反政治的無関心」とも言いうる時事問題への距離の置き方をしていた。ところが、日中戦争に入り込む中で、『スタイル』の目指していた時事問題からの距離の置き方が、逆に『スタイル』への需要を増していた可能性がある。そして『スタイル』自身も、日中戦争長期化という時勢にそれなりに対応していくことへの模索をしていた可能性が誌面からもうかがえる。

小論は、まず『スタイル』という雑誌が創刊された時の状況、そして当初の同誌の態度と対応について考える。そして、一九三七年七月の日中戦争勃発より、この雑誌がどのような記事や企画を掲載して、状況への対応をしていったかを見ていく。

一　『スタイル』創刊時の状況と対応

まず初めに、『スタイル』創刊前後（一九三六年から一九三七年六月にかけて）の日本国内における政治社会状況を概観しておく必要がある。一九三六年は、まずその年の初めから二・二六事件という大打撃に襲われた。既に一九三二年の五・一五事件において、戦前期政党政治は衰退し、政党からの首相は出なくなっていた。この事件を収拾していく過程で、さらに軍部の政治的発言力が強化されていくことになった。具体的には、岡田啓介内閣の総辞職後、広田弘毅内閣が成立した。広田内閣の中では、寺内寿一陸軍大臣に代表される陸軍が二・二六事件後の「粛軍」を通じて、国政全体の機構改革を主張していた。しかし寺内寿一陸軍大臣に対して一九三七年一月に濱田国松議員が衆議院で「陸軍の政治介入」について批判を行ったことがきっかけでいわゆる「腹切り問答」が勃発、この事件への対応をめぐって閣内不統一が生じ広田内閣は総辞職した。そして、後継首相として宇垣一成が任命されるも、陸軍大臣が得られず辞退するという中、満州事変での「越境将軍」林銑十郎が組閣した。しかし林内閣は総選挙の結果を見て短期間で総辞職し、一九三七年六月に第一次近衛内閣が

発足した。日本は二年間で首相が三回も変わるという変則的な事態が生じていた。[4]

しかもこの少し前から、日本の論壇では「一九三五、六年の危機説」がしきりとささやかれていた。これは、ロンドン海軍軍縮条約の更新期にあたり、海軍軍縮条約が合意に至らず国際情勢が緊張するのではないかというものであった。[5] 一九三六年七月にはヨーロッパでスペイン内戦が勃発していた。国内外の政治は少しずつ軍事色が強いものになっていたのである。

このような中『スタイル』は創刊された。その執筆陣は非常に華やかで、当時の俳優や歌手・作家・芸術家から外交官や政治家に至るまで登場していた。そして作家の中には、これ以前の時代に活躍したプロレタリア作家たちも含まれていたことはすでに先行研究で指摘されている。[6]

『スタイル』はグラビア頁を使い、内外の俳優の写真、また最新流行のファッションを紹介していた。特にハリウッド映画の俳優に関する写真や記事が毎号掲載されていた(ただし、カラーグラビアはなかった)。それ以外には、服飾に関する連載記事、流行に関する記事、一ページから二ページ程度の短編・掌編小説、そして読者からのファッションなどに関する質問コーナー、また常連執筆者等に対する一斉質問である「お洒落問答」のコーナーがあった。一九三六年は時事新報社から発行されていたが、同社が倒産したため翌年からは独自の出版社「スタイル社」が刊行していた。

創刊直後の記事では、政治・社会に関するものはほとんどない。外交官、笠間杲雄が登場して二回ほど執筆したりしているが、これも個人の趣味的な内容にとどまるものであり、全く時事的な内容ではない。[7] 第二巻となる一九三七年の第二号では、ナチス統治下のドイツで男性のファッションはどうなっているか、という記事が存在するが、ファッションの問題以外からナチスを書くことはしない。制服を着て右手を挙げれば礼服の代わりになる、などと書かれている程度である。[8]

そして、一九三七年の二巻三号編集後記に、既に先行研究でも記されて大変著名な、宇野千代自身の態度表明がなされた。それは、以下のようなものであった。[9]

「○『愉しい綜合雑誌』ある日、こんな肩書を考へました―軍部と政党がどうなってもスペインの内乱がいつまで続いても、せめてそんなイザコザの一行も書いてない雑誌が一冊位あっても好いんぢゃあないでせうか。○例へば、あああ！と草疲れ切った時あのインウツな『罪と罰』を見たがる人はさておき、『シャンパン・ワルツ』に五〇銭を投げ出す気持―が、そのまま『スタイル』なのだと思ひます」

ここにあるように、『スタイル』は政治・外交などの状況には意図的に言及しない、と宣言している。「軍部と政党」や「スペインの内乱」は同時代的に最も緊張している事項であったが、情況についての考察や分析には背を向けて、趣味や娯楽に徹した「愉しい」雑誌を作る、と読者に示した。「反政治的無関心」を貫く、とも取れるような態度の示し方である。ただ、このような態度表明は、何かを政治問題として言及すれば自身の立ち位置を問われるような時代には必要なものであったかもしれない。

その後も、日中戦争勃発までは、政治に触れないような書き方がされている。二巻五号では「ひげ」についての記事で「悲劇俳優としてのチャップリン、喜劇俳優としてのヒットラー」という言及がなされるが、それ以上には踏み込まない。また、日本には男女交際に関する社会的施設がない、という記事の中で、「学生は喫茶店を追はれ、女学生は先生(「オールドミス」とルビ―井笙)から映画を追はれ、ユダヤ人がナチスから追はれたやうに」と、学生の風紀取り締まりがナチスのユダヤ人迫害と並列してとらえられている。フランス外交官暗殺事件とファシストイタリアの関係を扱う記事も、どこまでもムッソリーニの女性遍歴という興味本位の記事である。[10] 日中戦争勃発直後には、インド独立運動家で「中村屋のボース」として著名なラス・ビハリ・ボースが登場するが、そこにあるのはカレーについてのエッセイである。[11] 政治・社会についての言及は一切しない、という編集方針は一貫していた。政治史で出てくるような人物でも、プライベートな好みなどについてしか語っていないのである。深刻な政治社会状況には入り込まないことで『スタイル』は成立していたのである。

このような『スタイル』が、一九三七年の日中戦争勃発後、情勢にどのように対応したか、次はこの問題を検討しなければならない。

二　『スタイル』の戦争への対応

軍部と政党が対立してもフランコがスペインで反乱を起こしてもわがことではない、と宣言した『スタイル』であったが、その『スタイル』も、自国が対外戦争に突入すると動かざるを得なくなった。自国の戦争は、自国の人員や資源の動員を伴い、当然刊行にも影響してくるからである。本節では、この日中戦争初期を『スタイル』はどう乗り切ろうとしたのか、ということを明らかにしていきたい。

二巻九号は、『スタイル』の誌面に戦争が現れる最初の号である。前述の、ナチスのユダヤ人迫害に冷淡に対応した執筆者谷長二は、「時将に、昭和十二年七月、聖戦の師一度立つや砲煙北支の天地を震撼して非常時の本舞台となりました。百廿度の猛暑を冒して、世界人類文化福祉の為に新興日本を守って戦ふものは外にあっては勇敢無比の兵隊さん、文化の為に重大な責任を感じて商戦に身を捧げるものは、エヘン、私たちであります」と書き出し、「最近の輸入統制により、日本のモードも日本の製品で作る事になったのは国産商品の向上と伴なって一日も早く完全な商品を作らねばならないといふことは我我の年来の希望であり、理想であったのであります」と述べた。[12] 戦争による物資統制を「ファッションの国産化」に結びつけようという内容である。そして、編集後記では、編集部員が召集されたことが書かれた。二巻一一号になると、より戦争色が濃くなる。掌編小説のテーマが「恋人出征」となり、五人の執筆者（真杉静枝、阿部艶子、石黒敬七、岡成志、夏村扇吉）が、まさに恋人が戦争へ召集されることをテーマにした作品を掲載した。[13]

より明快に開戦に反応したのは映画に関する記事だった。監督が召集されて戦地に行き、女優が国防婦人会に組織化され、軍への献金をしようという俳優たちの動きがあることを報じた記事がある。[14] また、映画人ではどのような人が出征したか、ということを、監督や俳優、そして製作スタッフのレベルまで氏名をあげて述べた記事も存在した。[15] 日本の映画人も戦争とは無関係ではいられないことを読者は知ることになる。反面、日本国内で制作される戦争映画の質が低いことを批判するものがあった。この記事は「西にスペインの動乱、東に支那事変、ひとはそれを、第二次世界大戦の前夜であると云ふ。映画がこの雲行に敏感でない筈がない」という今から見れば不気味な書き出しで始める。そして日本映画について「大体この種の作は、よほど思想的なものを狙ってゐない限り、スペクタクルとして企画されるものが普通であるが、これが日本映画の一番の苦手ときてゐるからお話にならない」と厳しい批判を投げかけていた。[16]

人々を夢中にさせない戦争映画に対置されるのは、戦線から送られてきた本物の動画や写真だった。戦線に同行取材し、現地の光景を動画で撮影したニュース映画は人々の心を激しくとらえたのである。[17] ニュース映画に関して書かれた記事は「最近の新聞誌上の写真でもさうだがニュース映画のカメラのトリミングの美しさフォーカスの巧みさ！弾丸と困苦の間にあってあれ丈の芸術性（？）を画面に盛り得る事は全く敬服に値ひする」と、戦場の現実がスクリーンに飛び込んだことに驚き、返す刀で日本の戦争映画について「せめて戦争をあてこんだ軍事映画とメイうったからには戦争の場面丈自分の国の幾千の生命が戦ってゐる場面だけでももっと正確にもっと鮮やかに力強く描いてもらひたいものだ、と思ってゐる」と批判していた。[18] 前述の小説特集「恋人出征」でも、ニュース映画について言及している作品がある。

その反面、戦争開始によって、『スタイル』には痛手となりそうな事実も出てきた。外国映画の輸入に制約がかかり始めたからである。一九三七年に外国映画の輸入が一時禁止された。映画評論家にして映画会社の経営もしていた筈見恒夫は、とりあえず見ることのできた外国映画の批評についてこう書きだした。「S・O君―／とうとう今年一杯洋画の輸入が禁止です。アメリカや、欧洲で作られる大半の作品が入って来た日本へ、まるで夢の様に洋画が来なくなったのです。あなたも御存知のJ・F君などは、輸入禁止と聞いて、いささか発狂気味でした。本当に洋画がなくなったら、こんな状態の青年が日本中に充満しないとは云ひ切れません」（傍点も原文のまま）。[19] 前述のように繊維製品に関する統制もかかり始めていた。ファッション生地についても、服飾用の材料が減少していることを認めつつ、強気な発言をする記事もあった。谷長二は、「持てる国」と「持たざる国」という言葉を使いつつ、「時はまさに超非常時であります／日本は戦争の為に、いや国家経済の立直しの為に全国民が一致協力して一時的な不便に耐えなければならないのであります／この時にあたって洋品雑貨の原料について考へるとき国産品の好きな僕もチトさびしくなります」と述べて、物不足が始まることについて述べていた。[20] 谷はさらに、中国

は国民政府のもとで「支那の伝統的な精神を排斥し、是にかわるに、政府の新しい、思想を目まぐるしく取入れて居る」が、日本は「明治大帝の教育勅語の御精神を守り畏み、外国の文化(ヨイトコロ)を取入れ、之れを消化し、高尚化し、実用化して、短時日の中に今日の如き文明国の栄冠を作り上げた」、どちらが優位なのかは現実で明らかだ、と言い、「文化の実需洋品の基本的なファッション」を「スタイル・ニッポン」の名前で語っていくということまで述べていた。[21] ファッションスタイルの違いから日中間の政治の優劣まで語ろうとしていたのである。

ところが、このあたりから誌面に出る記事に編集しベルでブレーキがかかったのではないかと見える部分が出てくる。三巻一号の映画評を執筆した内田岐三雄は「この雑誌の性質として、むづかしい批評を努力し、こね廻して書いたところでその労は報はれること少いやうに思ふ。そこで、今度は僕も手を変へて、映画の思想とか、その持つ社会性なんてことにはなるべく触れないで、もっぱら映画館行きの御参考として案内記を書くことにした」と、社会・思想面にわたる映画評論を書かないと表明していた。[22]

三巻二号には「お洒落ミリタリズム」という特集が組まれた。しかし、そこにあるのは現実に進行している日中戦争や関連記事ではなく、煙草をふかす男性俳優の写真(「伊達男一服」)、戦争中に髯が流行するというので、髯を生やした俳優についての話題(「ヒゲ・ア・ラ・モード」)、そして軍服を着た人が出るこれまでの映画(「軍服の魅力」)、というものである。「ミリタリズム」はあくまで流行語のように軽く扱われて、内容や定義には踏み込んでいかないのである。三巻三号の掌編小説の特集は「お洒落越境コント」と題されている。現代のわれわれには既に何のことかわからないが、同時代人にはすぐわかる内容だった。一九三八年一月に俳優・岡田嘉子と演出家杉本良吉がサハリンの国境を越えてソ連に亡命したという大事件である。漫談家・大辻司郎は作品中で「旅行免状もなく、とぼとぼと歩いて国境を越えるとなったら、越境ロマンスなんて云ふものは、絶対悲劇か、大活劇となるでせうが、漫談にはなりません」[23]と結末を予見したようなことまで書いている。しかし編集後記は「格別、岡田嘉子さんのこと、と言ふわけでもありません。ただ何んとなく、題して『お洒落越境コント』」と、時事問題とは無関係であると述べた。そして日中開戦後、興奮した筆致で戦争とモードなどについて書いていた谷長二はこの号で突然「商人根性のアサマシサ、羊毛、木綿の輸入制限で、痛せつに非常時を味はされたおかげで、お洒落の本道である、禅の心境からはなれ、いたづらに理論めいたことばかり、スタイル誌に書きましたが―／近代人は非常時だからと云って、軍歌ばかり聞かされたら、反動的に、ロマンチックなものにアコガレるもので、スタイル誌の行き方も、当然そうでありますので、これからのち、なるべく、固い事は書かぬ様にしようと思ひます」と、時事を論じる文章を書かない、と宣言したのである。[24] ここまで見ていくと、編集部で意識的に戦争に触れさせなかったという予測があり得る。

ところが、ここからさらに誌面は新しく展開していく。戦時下の諸政策をユーモラスに扱い、反面で国策への積極的な順応を図るような方向を見せた。ここに至っても『スタイル』はかなりの頁で華やかなファッションに身を包んだ映画俳優のグラビアを掲載していた。雑誌の読者を取り巻く情勢は少しずつ緊迫し、一九三七年には「国民精神総動員運動」が開始された。一九三八年五月には「国家総動員法」が施行された。社会・経済は統制強化が進んでいた。そのような中、誌面では戦時色をポップに言い換えるような内容のものが載せられていた。それが、小説家中村正常と、漫画家小野佐世男のコンビで作り出す同時代もののコントである。それは、「戦時色のある化粧を手伝ってやる」と女性の顔に出鱈目に化粧品を塗る男性の話[25]や、酒の不足にはビールを薄めて飲ませ、回転させて目を回させて酔ったつもりにせよ、という「花嫁学校」の話[26]、そして「ス・フ郎」と「ス・フ子」なる登場人物を登場させた作品もある。もちろん「ス・フ」はこの時期人造繊維として登場したステープル・ファイバーのことである。「ス・フ郎」は不良学生であったが、とにかく就職をしなければならない。しかし「そこが時代のおかげだ。国家総動員法のおかげで、すべて資源擁護の立場から、木綿でさへ三割はス・フを混入せニャならん」、だから「すくなくとも三割はワシみたいな怠け者を(企業も―井竿)代用品として混入せニャならん、といふことになるだらうと思ふんだ。ナニシロ、これが国策の線だからネ」とうそぶく。[27]

また、「ス・フ郎」と「ス・フ子」の出てきた同じ号では、やはりお洒落に気を遣う若い男女が突然破局するというコントがある。男性は女性を「まるでウノチヨさんのスタイルって言ふ雑誌の口絵に出てくるお嬢サンみたい」だとほめるような人物であった。しかしある日突然男性が、それまでのスタイルを

一変させ、坊主頭にし、絣の着物に下駄ばき姿で現れた。女性がそれをなじると、男性は「知らねえのか？オンナがヨーフク着たり、学生が頭の毛のばしたりしちゃ、ニッポンが戦争に勝てねえッてことだい」と感情的に言い返した。この登場人物がみせた突然の豹変と、裏腹に抱えていた精神的葛藤について、コントの作者北林透馬は次のように描写した。[28]

「つまり、坊チャンは、学校のお触れで、無理やりに頭をボーズにさせられてしまったので、ボーズ頭ぢゃ、まさか、セビロも着られないし、モダン型もやれないので、えいクソとばかし、一足とびにカスリに下駄、と右傾してしまった。

するとまた不思議なもので、服装が変ると言語動作が変ってくるし、気持までも変ってくる。

自分がボーズ頭で下駄バキだと、オンナの子が「スタイル」型洋装なんかしてるのを見ると無性に癪にさわッてくる。

癪にさわると、悲しくなる。

「何言ってやんだい、バカヤロ！オレ、キサマみたいな、コクサクのセンに乗らない奴なんか、大嫌ひだぞ！」

と言ふんで、つひにフタリの友情も解消してしまった」

戦争が長期化し、社会の雰囲気が変化する中での人心の煩悶と緊張を、北林は軽い筆致ながら的確にとらえていた。

そして、北林や中村のこのようなコントを載せた三巻九号には、グラビアでも変化があった。「スフ織物」や「代用品」のグラビア記事が掲載された。[29]そして代用品の記事には次のようなキャプションが添えられていた。

「代用品時代！新しい材料は　常に　新しい形と色を創る」
「新しいモードは絶えず新しい材料の発見にかかってゐる」
「代用品時代―そこに新しい美しさの発見がひそんでゐる」
「新しいモードには新しい線がある」
「『新しい線』―そこに新しい生活の角度がある」

そしてこの号の編集後記には、宇野千代自身が署名入りで、次のように書いていた。

「今月号から大分いろいろと誌面を改革してみました。少しでも、読者の方に楽しみになるやう、又一面には非常時の国策にも添ひますやうに、との心からです」

政治については触れない、と宣言した雑誌が「国策に添う」ことを公言することになったのであった。既に三巻七号から、編集後記上部にはゴチック体で

「お読みになったあとは　皆さんこのスタイルを　戦地の兵隊さん達に　送って上げてください」

と、読後の雑誌を中国戦線の日本軍に慰問品として送るよう要請するようになっていた。どちらかというと、若い女性がターゲットであるように見える『スタイル』が、男性性を最大限に要求されている人々である、戦争の最前線にいる将兵に送られたのである。ただ、戦線に配布されることになったことは、『スタイル』の誌面に多少の変化をもたらしたのではないかと考えられる。次にはこの問題を扱いたい。

三　ふたたび「愉しい総合雑誌」？

前節で、時事的な言及を抑制しながら編集されていた『スタイル』が、「国策に添う」という方針転換をはかるまでのことについて述べた。その一方、この時点で「国策に添う」のであれば、むしろ「愉しい総合雑誌」路線こそそうなりうる、ということも考えられた。この点について、多少述べてみたい。この節についてはまだ考察も検討も不十分であるが、一つの問題提起として述べておくことにする。

日中戦争が開始され、長期化する中で、日本国内から中国戦線へ向けて慰問品が大量に出てきた。その中でも重要なものは、何といっても書籍や雑誌類だった。これらの書籍が前線でどのように読まれていたかについては、中野綾子氏の論文がある。[30]当時日本国内で出ていた大衆誌（講談社の『キング』はその代表格だったとされる）も慰問品として送られていた。日中開戦に伴い、出版は事業として一時的に活況を呈するという状態にもなっていた。[31]軍隊自身も兵士の精神的慰安目的の刊行物作成にかかっていた。海軍は『戦線文庫』という

雑誌を発刊して将兵に配布した。陸軍は当初『恤兵』という部隊単位で配布される雑誌を創刊した。後に陸軍も兵士個人単位に配布するための雑誌『陣中倶楽部』を発行するようになった。そこには肩の凝らない記事や大量の読み切り小説などとともに、女優や歌手のグラビア頁が多く掲載されていた。押田信子氏はこの点に着目し、「兵士のアイドル」としての当時の女優や歌手の役割について分析を行った。[32]

さきに、『スタイル』が、読後の雑誌を戦線に慰問品として送るように、と呼び掛けるスローガンを掲載するようになったことを指摘した。この結果、実際に中国戦線から『スタイル』を購読する将兵がいたようである。そして、『スタイル』を実際に読んだ中国戦線の下士官から、以下のような手紙が来た、と編集後記は伝えた。[33]

「『スタイルってこれか』と無邪気な眼だけの様な戦友の顔が忽ち殺到。良い楽しい本を有難う御座いますやはり兵隊さんには日本の女優島田の姐さんが大もてですが、ケイ・フランシスはゲーブルはと喧しいヴォーグ氏も無きにしもあらずです。絢爛たるスタイルの出現に、陣中大騒ぎです。御返礼に漢口は必ずブッツブします。北支派遣軍、久慈伍長」

国内的には既に国民精神総動員運動が動き出し、少しずつそれまでの日常が失われていた。しかし、戦場に駆り出された日本軍兵士には、誌面に召集前に味わった日常があった。当時はまだ米英との開戦前であり、ハリウッド映画のスターが載った雑誌は問題がなかった。だから、日米両国の女優や歌手が掲載された『スタイル』はファッション雑誌としてではなく、まさに華やかな銀幕の世界から精神的に慰問してくれる写真の載った刊行物として歓迎された可能性が高い。前述の押田氏は、『戦線文庫』に兵士による「女優のサイン付きブロマイドがほしい」という手紙が多数掲載されていることに注目している。[34] 女優のグラビアやインタビューページ（一九三八年からは有名人の自宅訪問という企画もある）が多く載せられる『スタイル』は、その他の頁が女性向けであっても問題なく受け入れられていた可能性が高い。つまり、当初宣言した、時事を論じない「愉しい総合雑誌」の路線を貫いていくことが、実は最もこの時点での国策に沿ったものであったと言えるのではないか。

小括

宇野千代の『スタイル』は、少しずつ緊迫する内外情勢の下で、「愉しい総合雑誌」を掲げ、意識的に政治から遠ざかった。もとより、『スタイル』はそのタイトルにあるように、服飾や髪型の流行、そして人々の注目を集めていた同時代内外の俳優・歌手の動向や服装、併せて映画の紹介や小説を中心とした雑誌であった。

とはいえ、一九三七年七月の日中戦争勃発で、その路線はたびたび変更が模索された。積極的に状況を取り込むようなこともあれば、むしろ情勢への反応が抑制気味に示されることもあった。責任者の宇野千代自身が、一九三七年九号で「国策に添う」ことを明言したこともあった。とはいえ、戦地で日本軍将兵に読まれていく雑誌としては、無理に「国策に添う」ことをせず、グラビア記事と気分を重くしない掌編小説の掲載された「愉しい総合雑誌」が、最も国策に適合した雑誌であったとも考えられるのである。

とはいえ、国策に適応するための作業は、執筆し、編集する人々にとって気の滅入るものであったことは間違いない。時事問題から遠ざかろうとした『スタイル』においてすら、次のような文章[35]が掲載されたことがある。

「此の一ヶ年のジャーナリストぐらゐ醜態なものは無いと思ふ。パーマネント・ウェーヴ禁止説から始まって、鉄の制限から皮の問題に到るまで、問題を発する記者も答へる策者も狼狽の極致で、水鳥の羽音を敵襲かと考へた平家の侍そこのけの醜態であった。牛皮が禁止されると直ぐ『下駄を穿くのが国策だ』などと書く低能な新聞記者が現れ、また其の驥尾に附く流行紹介屋が新聞雑誌面を汚すのだし、日の丸弁当に限るなどと云ひ出して、六千万の国民が毎日梅干を三つずつ喰べると、在支那の兵隊が梅干にありつけなくなることも考へない。日本中の靴屋氏服屋氏が一挙に転業すると三年もたてば兵隊の服を作るものが足りなくなってしまふ事も考へない。斯ういふジャーナリストは早く撲滅するに限る」

日中戦争が長期化し、さらに他国との戦争すら懸念される中、『スタイル』がいかにして読者に読まれ、生きのびるために模索したかは、今後の課題としなければならない。

※小論は、令和四年度山口県立大学研究創作助成事業の助成による成果である。
またこの論文の内容については、二〇二二年一〇月二九日、韓国近代日本学会第四五回国際学術大会で口頭報告を行った。

注

(1) 宇野千代については、尾形明子『宇野千代』新典社、二〇一四年。『スタイル』については、松尾量子「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察　初期の誌面の変化を中心に」『山口県立大学学術情報』第一四号、二〇二一年、同「宇野千代編集の雑誌『スタイル』における初期のグラビアと『スタイル推薦衣裳』について」（『山口県立大学学術情報』第一五号、二〇二二年がある。

(2) 藤堂友美「第一期『スタイル』刊行の戦略」『国文目白』五〇号、二〇一一年。

(3) 内藤英恵「日中全面戦争とパーマネント排撃」『日本文化論年報』（神戸大学）七号、二〇〇四年。

(4) このあたりは、升味準之輔『日本政党史論』第六巻および七巻、東京大学出版会、一九八〇年を参照した。

(5) 慶応義塾大学法学部政治学科玉井清研究会編集・刊行『「1935・6年の危機」と日本のマスメディア』二〇一八年。

(6) 藤堂友美、前掲「第一期『スタイル』刊行の戦略」。

(7) 笠間杲雄「スタイルのさまざま」一巻六号、一九三六年、「心臓への捷径」二巻三号、一九三七年。前者はタイトル通り、文章や語り方、服装についての「スタイル」をめぐるエッセイである。後者は西洋料理についての知的エッセイである。笠間は外交官で、中東・イスラーム世界に詳しい人物であった。『回教徒』岩波新書、一九三九年など多数の著書がある。後に阿波丸事件に遭遇し死亡。以後、『スタイル』掲載の記事については、巻号数と年次のみを記すことにしたい。

(8) G・I・T「HERREN MODE」二巻二号、一九三七年。

(9) 二巻三号編集後記、一九三七年。『罪と罰』『シャンパン・ワルツ』は映画のタイトルである。

(10) 高橋徹「オヒゲ進化論（あるべきか・あらざるべきか）」、谷長二「スマート・エコノミイ（6）」高橋邦太郎「ついに曝露された独裁王の恋！流石は轟然一発・拳銃の音で開幕！」、いずれも二巻五号、一九三七年。既にナチスはドイツ国内でユダヤ人が生存していくための条件をほぼ剥奪するような措置を取っていたが、そのような事実はここでは全く言及されることがない。

(11) ボース「印度のライスカリー」二巻八号、一九三七年。署名は「ボース」としか書かれていない。独立運動と中村屋にいたことだけ簡潔に記されている。

(12) 谷長二「スマート・エコノミイ」二巻九号、一九三七年。

(13) タイトルはそれぞれ真杉静枝「エキストラ」阿部艶子「喧嘩も愉し」石黒敬七「恋人出征」中村正常「千人唇」岡成志「香水であります」夏村扇吉「あ！敵前渡河」である。編集後記では「時局多事、コント集も『恋人出征』。いづれも実話的興味の溢れた名篇揃ひ。同じカンガイの恋人たちに捧げたい。はるかに征途皇軍の武運長久を祈る所以」と、話を逸らすこともなく直接に出征した人びとに対する敬意が表明されている。

(14) 美町淑夫「映画スターの軍国熱」二巻一一号、一九三七年。美町については不明。この記事で言及される映画監督山中貞雄はこの翌年中国で戦病死することになる。

(15) 美町淑夫「映画界出征譜　撮影所から誰と誰が行ってゐる？」二巻一二号、一九三七

年。

(16) 双葉十三郎「戦争映画大流行」二巻一一号、一九三七年。双葉十三郎は翻訳家。

(17) 古川隆久『戦時下の日本映画』吉川弘文館、二〇〇三年を見ると、ニュース映画は劇映画に比べてこの時期人気があったことが記されている。ただし、日本軍が南京を占領した後からは、次第に人気も下降線をたどったという。

(18) 南美子「戦争物トピック　ニュース映画　軍事映画」、二巻一二号、一九三七年。南美子については不明。

(19) 筈見恒夫「ストック映画あれこれ」二巻一二号、一九三七年。

(20) 谷長二「スマート・エコノミ」三巻一号、一九三八年。

(21) 谷長二「スタイル・ニッポン」三巻二号、一九三八年。

(22) 内田岐三雄「新春映画案内」三巻一号、一九三八年。内田岐三雄は映画評論家。

(23) 大辻司郎「越境コント」三巻二号、一九三八年。

(24) 谷長二「スマート・ニッポン」三巻二号、一九三八年。この号は背広のことを書くことに徹したが、三巻五号の連載では再び「『父は父らしく、子は子らしく、若者は若者らしく』これは只今いはれてゐる国民精神総動員の主意にもなりませうが、またモードに以ても、自個をよく認識し、時局をよく認識して、僅かのユトリで、われわれの青春と理想、美しさに憧憬れる心と、美しいものを建設する嬉びを、われわれに毎日必要な、衣食住に於てのもっとも身近な服飾の美と経済（「スマート・エコノミイ」とルビ）の建設こそ、文化的な仕事であり銃後の若人のなさねばならぬことであると思ふのであります」と戦時下の心構えについて書いている。この後、谷の記事はあまり出てこなくなる。

(25) 中村正常・小野佐世男「僕がお化粧したげるなら」（トーチカお化粧戦術）三巻五号、一九三八年。

(26) 中村正常・小野佐世男「新形式スタイル・ショウ　長期抗戦」三巻七号、一九三八年。しかし、タイトルは既に「長期抗戦」と、中国との戦争が容易には終わらないことを示すものが入っている。

(27) 中村正常・小野佐世男「新形式スタイルアトラクション　ス・フ精神」三巻九号、一九三八年。ただ、このカップルの同棲生活では、牛乳に米のとぎ汁を混ぜて増量したり、料理の蝋細工を並べて食生活の貧困を堪えたりする、という描写がある。

(28) 北林透馬「空は何故変るか」三巻九号、一九三八年。これは「男心と秋の空」と題するコント特集の一編である。北林自身もこの翌年、『花ひらく亜細亜』という作品を出し、国策に順応する道に踏み出していった。これはユダヤ陰謀論なども加わった小説である。日本の戦争が対米英へ拡大すると、陸軍の報道班に加わっていくことになる。

(29) ヴォーグ・スタヂオ「代用品売場から」三巻九号、一九三八年。

(30) 中野綾子「慰問雑誌にみる戦場の読書空間」『出版研究』四五号、二〇一五年。

(31) このあたりは佐藤卓己『「キング」の時代』岩波書店、二〇〇二年が詳しい。

(32) 押田信子『兵士のアイドル』旬報社、二〇一六年。また、近現代日本エンタメ研究会『戦争と芸能』扶桑社、二〇二二年や押田氏の著書『元祖アイドル「明日待子」がいた時代』扶桑社、二〇二二年。押田氏は、女性作家たちが結集して作成した『慰問文集』についても論じている。

(33) 三巻一一号の編集後記。

(34) 押田前掲『兵士のアイドル』。

(35) 長谷川修二「男は洒落てもいいか?」三巻一〇号、一九三八年。

The "*Style*" Magazine in Early Japan—China War,1936—1938

IZAO Tomio

This article explores the relationship between media and politics during the war between Japan and China through articles published in *"Style"* by Uno Chiyo in 1936.

Uno declared this magazine was going to be "a fun magazine", and would not cover comprehensive political issues. However, following the outbreak of the Japan-China war in 1937, war-related articles appeared, but later suppressed.

Eventually, Uno decided that the magazine adopt a governmental policy. However, *"Style"* did not become war time magazine. This article examines the reason for this.